



|         |
|---------|
| 2019年   |
| 10月15日  |
| No. 157 |

## 2019年度 東京蜘蛛談話会例会

1. 日時 2019年12月1日(日) 10時より(開場9時30分)
2. 場所 東京環境工科専門学校 〒120-0022 東京都墨田区江東橋3-3-7  
JR 総武線 東京メトロ半蔵門線 錦糸町駅南口から徒歩7分
3. 連絡 当日は、東京環境工科専門学校の電話が使用できないので、緊急時には以下に連絡ください。  
加藤輝代子 090-7012-6458 初芝伸吾 090-6156-8378
4. その他 プロジェクター、OHP 等用意いたします。
5. 講演をご希望の方は、演題と使用希望機材  
(スライド、OHP、コンピュータ)  
を事務局初芝までお知らせください。

〒186-0002 東京都国立市東3-10-8 コンフィデンス高垣 105  
有限会社エコシス 初芝伸吾  
mail : hatsushiba-ecosys@h8.dion.jp  
Tel : 042-501-2651 Fax:042-501-2652

● 錦糸町駅南口から徒歩3分です。



## 東京蜘蛛談話会 2019 年度採集観察会

1. 期 日： 第3回 2019年10月20日（日） 第4回 2020年2月16日（日）
2. 場 所： 天覧山
3. 集 合： 集合 10:00  
西武池袋線飯能駅改札  
徒歩で天覧山まで移動  
遅れた方は、バスもあります。（ただし1時間に2本）
4. 世話人： 平松毅久 080-6633-2737・嶋田順一

### 京都だより（9）関東地方の希産種が…

新 海 明

私が初めてアワセグモを見たのは、大阪で万国博覧会が開催された 1970 年のことだ。万博の会場を訪れたついでに、東海遊歩道の西のはずれに位置する箕面（東のはずれは東京の高尾山だ）を訪れた時だった。何の樹木かはすでに忘れてしまったが樹皮下に潜んでいたカニグモのようなクモを採集して持ち帰って兄に見てもらったところ「アワセグモと言ひ、関西には多いんだ」と教えてもらった。

それから十数年経ち、吉田真さんが主催していた関西クモゼミに毎月のように通っていた時に、アワセグモの話を何気なくしたところ、吉田さん曰く「家のそばの神社の木にたくさんおる」というのだ。当時、私は吉田宅を京都の定宿のように使わせてもらっていたので、「ではアワセグモの調査をしよう」ということになった。

アワセグモがたくさんいる神社というのは、左京区修学院離宮のそばにある鷲森神社であった。吉田宅の懐中電灯を拝借して調査をした結果は、かつて中部蜘蛛懇談会会報の「蜘蛛」に報じたことがある（新海 1992）。アワセグモは最近になって関東地方（東京都・埼玉県）でも貞元さんらや大生さん・平松さんによって発見されたが（貞元 2013, 新海・谷川 2018）、かつては関東地方では見られないクモであった。

同じように関東ではあまり採集できず、関西に来れば比較的頻繁に見られるクモとしてはオダカグモがあげられる。吉田宅から比叡山へと延びる「雲母坂(きららざか)」の溪流沿いの山道でオダカグモをいくつも発見したことがあった。80年代の東京では(今も同じかも)オダカグモは希産種だったので驚いたものだ。私が「オダカだ！オダカだ！」

と発見に興奮していたら「このクモならこのあたりに、たくさんおるで」と言われて、あぜんとした思い出がある。

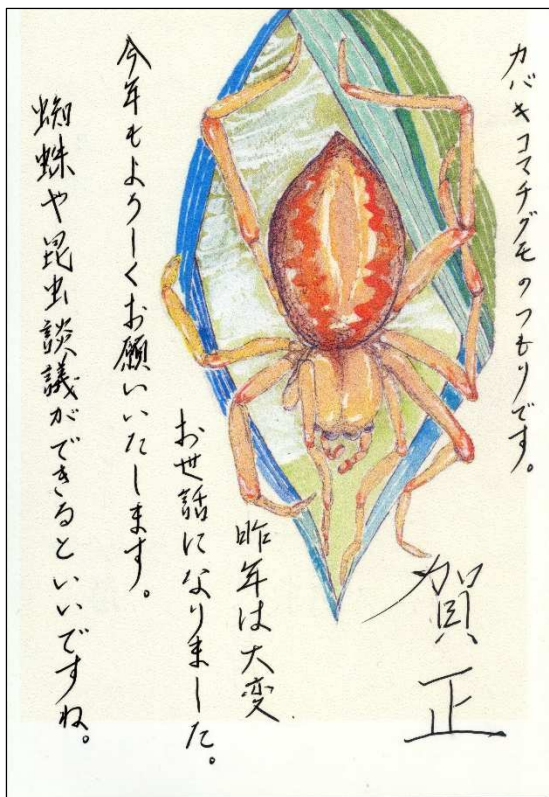
極めつけは「ヒトエグモ」だろう。初めて関西へ行ったときに「ひと目ヒトエを！！」と思ったものだ。吉田さんは京大の学生時代に寄宿していた東福寺の宿坊で発見したことがあると言っていた。「そうか、寺社の建物内でしか見られなければ無理だろう」と納得した。しかし、当時関西クモゼミに参加していた牧野達也さんは自宅付近に「な、なんと蜘蛛礁(漁礁のクモ版という)」を作り「あわよくばヒトエグモがざっくざく捕獲できるかな」という、ものすごい野外実験をしていたことがあった(牧野 1999)。結果的には、残念ながらヒトエグモの捕獲には至らなかったというが、「大胆な発想だなあ」と感心したものだ。その後も関西に行くと「京都の動物園で見つかったが、改修工事があり、もう駄目だろう」などという噂話は小耳に挟んだこともあった

ところが最近になって、2017年2018年と立て続けて藤野義人さんにより、関西クモ研究会の「くものいと」や東京蜘蛛談話会の「KISHIDAIA」に発表されたヒトエグモの報告には、まさに度肝を抜かれた(藤野 2017a, 2017b, 2018)。藤野さんはヒトエグモの生活史を解明したばかりでなく、京都府やその周辺でのヒトエグモの分布まで明らかにしたのだ。そして、「ヒトエグモは『屋内性のクモである』という通説を捨て、屋外の石像建造物や木造建造物、大木の樹皮等を積極的に探索することにより成果が得られると確信している」と述べている(藤野 2018)。

私も「今までの通説を捨てよ」と、どれだけ言ってきたか。藤野さんによるヒトエグモの発見で、私も「まだまだ甘い」ことを思い知らされた。もうすでに、クモ人生の終盤に差しかかっている私の、この先の夢のひとつは野外で「ヒトエグモをこの目で見たい」というものだ。藤野さんの報告を読む限りポイントさえつかめばヒトエグモの採集(もう捕る気はないので、この目で見るだけにしよう)はさほど困難ではなさそうだ。そして、この「京都だより」はヒトエグモの観察報告をもって最終回としよう。

#### 引用文献

- 藤野義人 2017a. 京都府京都市におけるヒトエグモの生息分布調査.くものいと (50) : 48-51.  
藤野義人 2017b. 京都市上京区御霊神社に生息するヒトエグモ. KISHIDAIA, 111 : 24-31.  
藤野義人 2018. ヒトエグモの生息分布調査 2(京都市以外の地域).くものいと, 51 : 10-14.  
新海明・谷川明男 2018. 採集情報. 遊絲, 43 : 7-8.  
牧野達也 1999. 蜘蛛礁計画. くものいと, 25 : 12-20.  
貞元己良 2013. 都内でアワセグモが見つかった. KISHIDAIA, 102 : 1-2.  
新海明 1992. 洛北鷲森神社のアワセグモの観察. 蜘蛛, 25 : 5-7.



2019年にコウさんから届いた年賀状には、カバキコマチグモが描かれていました。

なぜカバキコマチグモを選んだのか、年明けにお礼を伝えて聞いてみると

「小学校4年のとき、自由研究で千国先生の本を見てクモの研究をしたんです。もう昔のことなので、どんな研究をしたかは忘れてしまったけれど、その本に載っていたカバキコマチグモのことが印象に残っていたので描きました」とのこと。

なんと！小4で千国先生の本を教材に選んでいたとは！蜘蛛歴、私よりコウさんのほうが、全然長いじゃん！とまたまた感心してしまうのでした。

そして、年賀状の最後には「蜘蛛や昆虫談義ができるといいですね」と嬉しい言葉が。私の仕事はふだんは蜘蛛や虫とは直接関係していないのですが、昼休みにご飯を食べながら、蜘蛛や昆虫の話を楽しめることは、なんと素敵なことでしょう。

蜘蛛や虫が嫌いな人が、遠巻きに変な顔してるのをちょっとは気にしたりしつつも、あまり遠慮することなく、私たちは蜘蛛や昆虫の話で盛り上がるのでありました。

.....

「変わった形だなあと思って描いてみました」とキジロオヒキグモの絵を持ってきてくれたコウさん。

「実物を見ないと、細かいところはわからないですね」と言います。

実物を見ても、絵にするなんて到底できっこない私ですが、キジロオヒキグモを初めて見たときの驚きをコウさんに勝手に熱く語るのです。

私が初めてキジロオヒキグモを見たのは八王子城址での観察会に行く途中で、木の幹の下の方に網を張っていたので、じっくり観察することができました。

それと前後して、談話会の合宿だったように思いますが、木の上の方に網を張っているのを見上げた記憶があり、こんな高いところにも居るんだな—とと思いました。

以前、「こういう所にいる」と決めつけてしまうと蜘蛛を全然見つけられないことがある、と新海明さんが言ってたのを思い出し、そういうことなんだなあとあらためて納得したのです。

(中島亜紀)

## 新刊紹介



馬場友希

クモの奇妙な世界 その姿・行動・能力のすべて

ISBN : 978-4-259-54769-1

家の光協会

352p. 1,944 円

入退会は：

事務局 初芝伸吾 〒186-0002 東京都国立市東 3-10-8

コンフィデンス高垣 105 有限会社エコシス

E-mail : hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp

通信原稿投稿先：

谷川明男 〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷 1-4-2-1416

E-mail : dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp

通信の原稿締め切りは、4 月末、8 月末、12 月末です。

# 夢の続きは

(ハエトリグモのタクヘイ)

加藤康子

私は、私の夢の中を歩いていた。

雑木林の曲がりくねった道を辿り、家に帰ろうとしていた。

林の中は静かで、鳥のさえずりも聞こえず、小動物の動く気配もしない。見上げると、深い緑、浅い緑、明るい黄味を帯びた緑の、細かい葉に彩られた空が、モザイク画のように続いていた。上空には風が吹いているらしく、雲が流れてゆく。

もう、どれくらいの距離を歩いてきたのだろうか、家はどの辺りにあるのだろうか、考えながら、夢の中を行くということに、手探りのもどかしさを覚える。

いったい、どうしてこの頃は、見知らぬ場所を家に向かって歩く夢ばかり見るのか、解らない。年齢的なものだろうか。そんなことをくどくどと考えながら歩いていた。

やがて、道の先に、光の注ぐ空間がかすかに透けて見れる場所にやってきた。

「野原だ！ やっと野原に出られる」

弾む気持ちで林を駆け抜けると、パッと視界は開け、一面の緑の野が目にとびこんできた。そこには光沢のある細かいカヤが生い繁り、風が吹くといっせいにざわざわと吹きながら、とりとめなく揺れ、密集した葉の表面が、日の光を受けて、ベルベットのように輝いた。

私は周りを見渡した。花を探したのだ。この季節によく見かける、クズの花や仙人掌、オオマツヨイグサ、それに夕暮れ時に花を開くカラスウリがどこかにあるかなと思った。

しかし、何故かそこには一輪の花も無く、シンプルなカヤの草原に、一本道がずっと伸びているばかりだった。

しっくりしない微妙な気分のままで、一步を踏み出すと、地面は意外にも湿っとりしていた。土の良い香りが立ちのぼってくる。土が呼吸すると言えばいいのか、一足ごとに、地中の生気に足首からつつまれて、身体中のもやもやしたものが足裏から逃げてゆく。そんな感じだ。

『やっぱり土だなあ』と思った。つくづく『土の上こそが私の心の在り処』と思う。

私は、もくもくと歩き続けた。カヤの野はわずかに傾斜してきて、道のほとりに大きな山胡桃の木が見えてきた。何枚も連なって並ぶ葉を、快活に広げた枝先に、まだ小さい緑色の実が集まって房飾りを作っている。

野原に立つ大きな胡桃の木。新しい変化は嬉しい。私は立ち止まりホッと息をついた。帽子を脱ぐと、涼しい風がほわほわと髪を広げ、剥き出しになった耳に、遠くの方から風に乗って、やわらかな笛の音と、どんどんとなる太鼓の響きが聞こえてきた。

「お祭りでもやっているのかしら」

祭囃子の音だ。ここを下って行けば町があるに違いない。そこで見覚えのある場所が見つければ、

きと私の帰り道もわかるだろう。

視野の隅に、ちらっと動くものが見えた。えっ？ と振り向くと、胡桃の木の幹の後ろから幼い子供がひょこりととび出てきた。『あれっ 子供じゃないの』と思うまもなく、子供は素早い動作で、右へ左へとびょんびょんと跳びながら走ってくる。

「すごい！ あんなに小さいのに稀に見る運動神経じゃないか」

呆気にとられていると、子供は私のすぐ近くまで来てピタリと止まった。五才ぐらいの男の子だ。暑い日なのにきちんとジャケットを着て、その上、派手なお面を被っている。お祭りの出店で買ったのだろうか。

「こんにちは、キミ一人なの、どこから来たの」

彼は胡桃の木を指差した。

「素敵なお面してるのね。見たことないような精巧な作りだわ」

彼は少し首を傾げ、両足に力を入れて踏んばると胸元で腕を組んだ。幼い男の子がちよっと生意気なことを言いたいときに、よくする仕種だ。

そのとき、お面の大きな目がぐるっと動いて、ピカッと光ったような気がした。もう一度よく見ようと目を凝らすと、なんだか変なのだ。目だけでなく、顔のあちこちが微妙に動いて少しずつ変化している。それに、少し生っぽいような質感もあるし、いったいどういうことなのか、私は、おそるおそる彼に近づき、横や斜めの角度から眺めてみた。

構造だけではない。驚愕すべきはその美しい色彩だ。濃密で個性的。太陽光線を反射して金属に似た強い輝きを放つ不思議な物体。

私の頭の中で「ハーン？」と声が出た。—お面なんて、とんでもない—

「キミ— わかったわよ。キミはどうやら人工知能みたいね、ロボットなんでしょう。きっとそうよ。誰かがメカに弱いおばあさんとロボットを遭遇させて、どんな反応をするかって、どこかで笑って見ているのよね。私をからかっているんでしょう。どこに隠れてるか知らないけど、すっかりやられてしまったわ。」悔しいが、ここは笑うしかないようだ。

すると、そんな私を制するように、ロボットは片手を挙げて声を発した。

「ボク、ロボットじゃありません。本物の生きているハエトリグモです。」

予測のつかないことが起きると、人は息をのんで言葉を失う。私も目の前にいるロボットが発声も滑らかで、申し分のない見事な話し振りをするのにただ驚いていた。

「最近では、ロボット工学の進歩も目覚ましいって聞いてはいるけど……」

感じ入ってる私を見て、ロボットはさらに語気を強めた。

「だから、だから、聞いて下さい。ボクは本当に本物の生きているハエトリグモですよ。ハエトリグモのタクヘイといいます。」

「タクヘイ？」

「ええ、卓の上を平らかにするという意味の卓平です」

ハエトリグモなら凶鑑で何度も見たし、実際に 家の中でピョンピョンと走り回る姿を虫眼鏡を持って追いかけたこともある。

「あのね、タクヘイクんとやら ハエトリグモと出会えることは、とても嬉しいことよ、私はクモが好きな人間だから、だけど、考えてみて、本物のハエトリグモの大きさはせいぜい小指の先ってところよ。キミは何十センチあるというのよ。第一に、足の数だって足りないじゃない」

彼は黒々とした左右の顎をちょっと開いてにんまりと笑った。

「おばさん ボクは今、おばさんの夢の中にいるんです。夢の中では誰でも、たとえクモだって、好きな形や大きさになれるんですよ。おばさんは想像力をもっと大胆にめぐらせてボクのことを見て下さい」

彼は 得意げに胸を反らして、おもむろに上着のボタンをはずした。驚いたことには、そこに横に長い内ポケットが四つあり、きれいに折りたたまれた足が四本、行儀よく並んでしまわれている。

「ねっ、本物のハエトリグモでしょ」

